

# Medical Professional Training Program



Kansai Medical University  
高度医療人育成(スーパードクター)制度

 関西医科大学卒後臨床研修センター  
KANSAI MEDICAL UNIVERSITY CLINICAL TRAINING CENTER

〒573-1191 大阪府枚方市新町二丁目3番1号  
TEL:072-804-2847 / FAX:072-804-2952

URL: <https://www.kmu.ac.jp/residency/>  
MAIL: [sotugori@hirakata.kmu.ac.jp](mailto:sotugori@hirakata.kmu.ac.jp)



2022年3月発行

## 世界の トップレベルをめざして

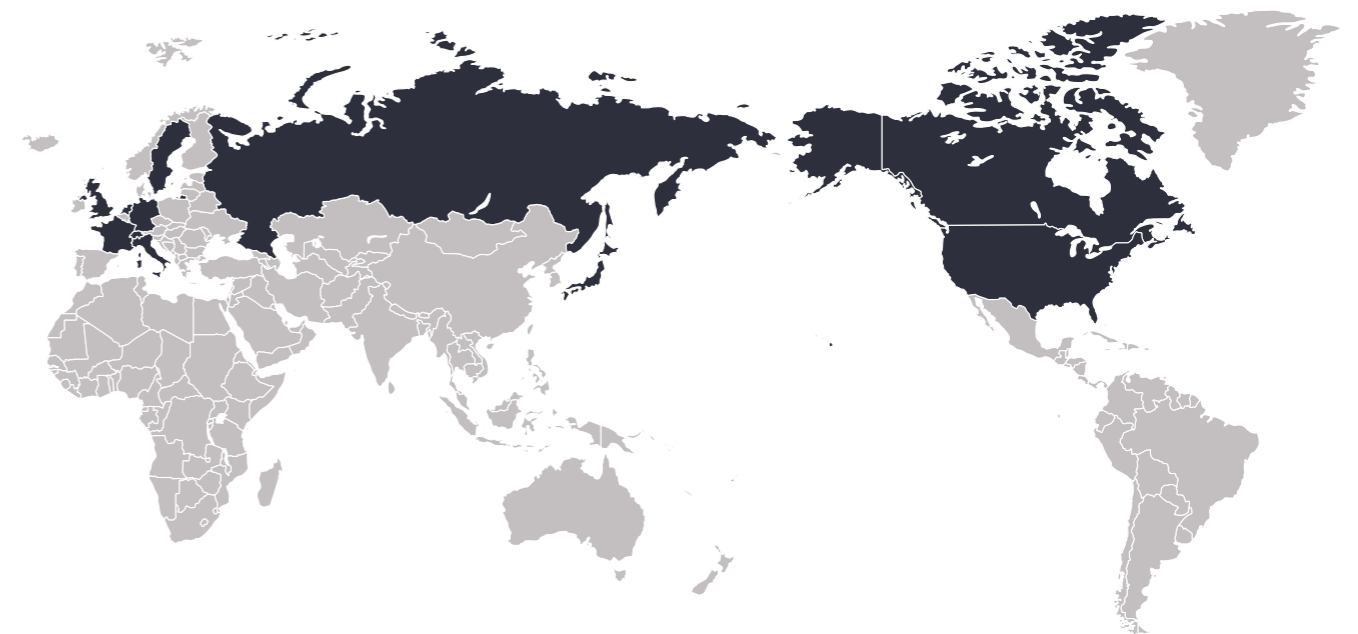
本学は今、医学・医療のグローバル化をめざして様々な活動を行っています。4月からは新しく「国際化推進センター」を関医タワー内に設置し、国際交流だけでなく、研究、広報、医療支援の分野にも国際化の範囲を広げ、事業を展開する予定です。その中には医療人のさらなるキャリア形成のための「高度医療人育成(スーパードクター)制度」があります。これは国内外のトップレベルを誇る医療施設に臨床留学し、最新・最先端の医学・医療を学び、ひいては本学の診療レベル向上に貢献してくれるスーパードクターを育成することを目的としています。さらには国外への留学を通して、語学の壁を乗り越え、海外の文化、習慣、価値観等の違いを経験し、友好を深め、国際的感覚を身に付ける絶好の機会かと思えます。2010年にこの制度が発足し、これまで10名の医師が世界各国に留学し、帰国後各々の分野で活躍してくれています。皆さんの貴重な経験を病める人のために、そして社会に還元して欲しいと思います。何人かの留学経験談が綴られていますのでそれを参考に、是非この制度を活用して世界を舞台に活躍する医師をめざしてください。

学長 友田 幸一



## 関西医科大学は 世界に通用する技術を持った医師を育成します。 目指せ！スーパードクター！

目的	■ 国内外の医療施設に留学することにより、最先端の診療技術や診療体制を習得し、世界で通用する医師を育成するとともに、本学の診療レベル向上を目的とする。
留学期間	■ 原則として1年以内とする。
条件	■ 本学の臨床系講座・診療科に所属する専任教員(助教以上)のうち、専門医を取得している者とする。 ■ 本学に復帰後5年以上勤務し、習得した診療技術・診療体制により本学の診療レベル向上に寄与すること。
審査	■ 書類審査：履歴・業績、応募までに習得している診療技術。本学への貢献度。 ■ 面接審査：優れた人間性を有し、将来を期待できると判断される者。
待遇	■ 留学期間中の基本給、家族手当及び住宅手当が支給されます。 ■ 上記に加えて、国外の施設に留学する場合、50万円の旅費が支給されます。 ■ 留学後は、留学前と同等の身分で本学に復帰できます。



### 留学先一覧

■ アメリカ・ロサンゼルス	Cedars-Sinai Medical Center	■ カナダ・トロント	Toronto General Hospital
■ アメリカ・ニューヨーク	Memorial Sloan Kettering Cancer Center	■ スイス・ベルン	Bern University, Inselspital Hospital
■ アメリカ・ロサンゼルス	Ronald Reagan UCLA Medical Center	■ スウェーデン・ストックホルム	Karolinska University Hospital
■ イギリス・ロンドン	St. George's Hospital	■ ドイツ・アーヘン	University Hospital RWTH Aachen
■ イギリス・ウィガン	Wrightington Hospital	■ ドイツ・マインツ	The Johannes Gutenberg University of Mainz
■ イタリア・ヴェローナ	Verona University	■ フランス・パリ	Henri Mondor Hospital
■ イタリア・ミラノ	Casa di Cura Privata	■ ロシア・クルガン	Ilizarov Scientific Center
■ オランダ・ナイメーヘン	Radboud University, Nijmegen Medical Center	■ 日本	国立がんセンター、大阪府成人病センター



整形外科学講座

准教授 眞賢一

留学先施設名

1. フランス・パリ  
Henri Mondor Hospital
2. イギリス・ウィガン  
Wrightington Hospital
3. スイス・ベルン  
Bern University, Inselspital Hospital
4. オランダ・ナイメーヘン  
Radboud University, Nijmegen Medical Center

留学期間

2011.4.1~2012.3.31

— 英国(2011年7~9月)

英国は、Leeds (Chapel Allerton Hospital)、Wigan (Wrightington Hospital)、Norwich (Norfolk & Norwich Hospital)、Edinburgh (Royal Infirmary of Edinburgh)、Exeter (Princess Elizabeth Orthopaedic Centre)の5施設を順にまわって行きました。どの施設も基幹病院のため非常に大きく、「人工関節」のルーツの国らしくシステムティックに手術が行われています。しかし、英国はテロを非常に警戒しており、制度だらけで見学するまでは一番大変でした。“Wrightington Hospital”は、Sir Charnleyが手術されていた“人工関節の聖地”です。半世紀経ってもなおそのコンセプトを超えることができず、生きておられたら間違いなくノーベル賞でしょう。ちなみに、英国の医学生は、一番成績の良い人が整形外科医になるらしく、その中でも人工関節は花形だそうです。“Wrightington Hospital”はSir Charnleyに始まり、Mr. Wroblewskiが後継し、現在はMr. Kay (現英国整形外科学会会長)がトップで、15人ほどのConsultantが働いています。「よくまあこんな片田舎で…」と思ってしまう場所ですが、成功の要素はいろいろあったみたいです。Charnley先生はManchester出身で、この地の前身である結核療養施設が不要となり、まず「場所」があったためですが、彼自身が“artist”ではなく“engineer”であったこ

とがやはり大きかったと思われます。つまり、産業革命の影響が強く、地形的にWiganはManchesterとLeedsの間にあり(運河や高速道路の「世界初」はこの辺りなのです)、「良い品質のものを大量生産」するために様々な試み、すなわち一人の優秀な外科医ではなく、教育を受けたたくさんの外科医により流れ作業で手術をし、フォローアップにてカスタマーサービスを行うという思考があったのです。また、「クリーンルーム」という発想も、工場から学んだらしいです。そして、1960年代後半、当時はまだCharnley先生自身も手術を隠していた時代に、京大の長井先生が日本へ持ち帰り本邦での人工関節の歴史が始まりました。



Edinburgh Universityの“Royal Infirmary of Edinburgh”は、ここのProf. Breusch著書の「The Well-Cemented Total Hip Arthroplasty」という教科書を飯田教授が中心に翻訳し、私もtranslatorの一人であったという縁から来ることができました。彼はドイツ出身ですが、あまりの忙しさに嫌気がさし、8年前の37歳で教授となって移住して来たという経緯があり、若くして教授になっただけあって人間的にもgentlemanでRegistrarへの指導も大変熱心でした。“Royal Infirmary of Edinburgh”は、創立1729年(日本なら江戸時代!?)のScotlandで最も歴史が古い病院で、もちろん病院は非常に大きく、整形外科だけでもたくさんWard(病棟)があり、Consultant, Registrarはそれぞれ20人以上います(つまり整形外科医が50人近くいます)。だからこそ勉強になるのはそのシステムで、まあ、日本では無理な面もありますが、フォローする方法はやはり取り入れないといけないと実感しました。

— スイス(2011年10~12月)

Bern Universityの“Inselspital Hospital”は、「股関節温存術」で世界をリードしており、「Femoro acetabular impingement (FAI)」という概念に伴う“診断”と、先代教授のProf. Ganzが考案されたPeriacetabular osteotomy (PAO) およびSurgical dislocation (SDH) という“治療”が看板です。故に、Fellowも大変多く、僕が滞在した3ヶ月の間も入れ替わり立ち替わり20人ほど各国から来ていました。現在はProf. Siebenrockを中心に4人の股関節外科医がいて、毎日7時15分から始まる総勢40人ほどの整形外科全員によるカンファは、フランスや英国では無かったことなので妙に新鮮でした。また、外来が特徴的で、まず教授以外がそれぞれの部屋で診察し、その後みんなの居る控え室で画像を見ながら教授にプレゼンをして、教授と一緒に診察に行くというスタイルなので、全例教授が目を通しており、完全に「ピラミッド型」のチーム制です。ゆえに、外来医は5人で30人ほどの紹介患者しか診ませんが、驚くのは彼らの“語学力”で、フランス語圏からの患者の診察では、フランス語で患者に話しながら僕らに英語で説明し、もちろん母国語はドイツ語ですから頭の中はどうなっているのか考えてしまいました。FAIに対する治療は「labrum tear」には“morphology”が関与しており、後者を治療しなければ根本的には治らない」という考え方が一番勉強になりました。



— ドイツ(2011年12月)

Bern在住中にHamburgの“ENDO-Klinik”にも行ってきました。ここは、年間3,500例以上の人工関節置換術を施行されている欧州屈指の「整形外科専門病院」で、「抗菌薬含有セメント」のルーツである

ため“感染予防・治療”の考え方を勉強したくて訪問しました。ちなみに、「抗菌薬含有セメント」は、1970年Prof. Buchholzによって初めて報告され、1972年からENDO-Klinikでは使われていますが、日本では未だ使用が認められておりません(僕が見学した施設で使用していなかった病院は皆無でした)。7時30分麻酔出し、8時執刀開始となるのですが、手術室は全部で8部屋あり、5~8番ルームは一つの大部屋なので、一斉に始まる姿は「F1のピットイン」みたいで圧巻でした。また、症例数が多いため、あらゆる面で医療経済とのバランスを考えbetterな方法を選択しているようで、宇宙服は使用しない代わりに帽子が服の中に入るタイプを使っていたり、手洗いやマスクチェンジなどもEBMのあるものを採用しており、トイレもパンツ一枚になってもう一度着替えないと行けない構造になっていました(附属病院のトイレの場所は問題だと思えます)。

— オランダ(2012年1~2月)

Nijmegenの“Radboud University Medical Center Nijmegen”は、1984年Prof. Sloofによって報告された“Impaction Bone Grafting (IBG)”のルーツです。現在はDr. SchreursとDr. Gardeniersを中心に年間400例程の人工関節を施行しており、規模としては附属病院の雰囲気似ています。IBGは再置換術に用いられるテクニックですが、興味深いのは“骨壊死”にもIBGを応用していることで、「フランスで学んだ“骨髄移植”のテクニックとcombineできればより面白い結果になるのでは」と思いながら、日々手術に入っていました。また、論文で書かれていることと実際にされていることが少し異なっていて、質問すると「まだ分かっていないことが多いんだ」と正直に言っておられたのも印象的でした。

— 米国(2012年3月)

FAIの概念をBernで勉強し、どうしても股関節鏡の技術を学びたくなり、米国で教科書等を執筆されておられるNashvilleのProf. Byrdの施設に行ってきました。自分が目指すべき完成された技術を見学することができ、細かいテクニックもいろいろと確認することができました。1年間、様々な方のお世話になり、本当にありがとうございました。この場をお借りして深謝いたします。



私は2011年4月から1年間、「関西医科大学高度医療人育成(スーパードクター)制度」にて欧州への臨床留学の機会を得ることができました。当初はフランス、英国、スイス、オランダの4カ国に行く予定でしたが、滞在中知り合った先生からも紹介していただき、ドイツ、米国を含めた12施設の各国を代表する股関節外科医の手術を見学することができました。自分の人生にとっても大変貴重な経験をすることができましたので感謝とともに報告させていただきます。

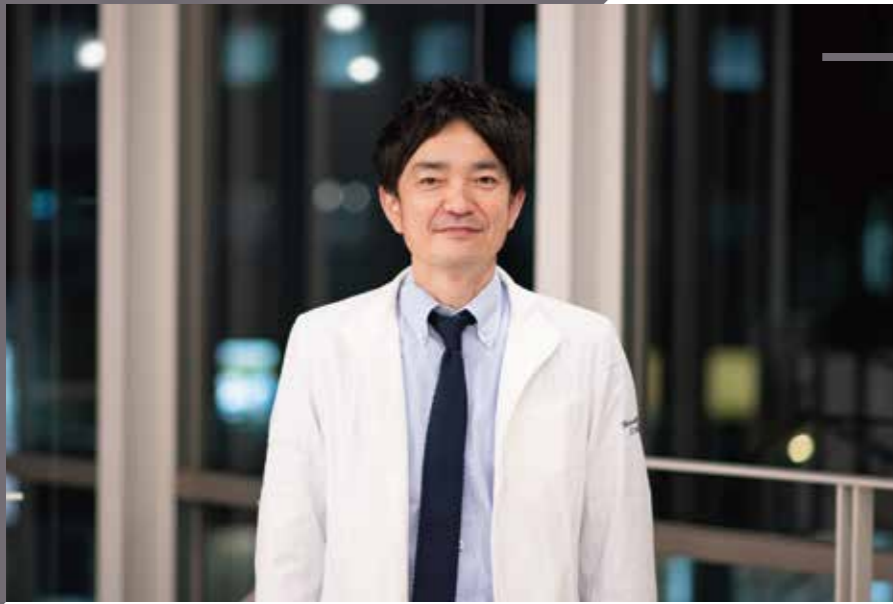
— フランス(2011年4~6月)

パリの“Paris XII University (Hopital Henri Mondor)”を拠点とし、“Centre Medico Chirurgical Paris V”や“Hopital Cochin”の見学にも行きました。“Hopital Henri Mondor”は、Prof. Hernigouを中心に、あらゆる“骨壊死”と“偽関節”に対して「骨髄細胞移植」をしていることで有名です。本邦では動物実験から臨床応用しつつある分野ですが、ここでは10年以上前から人間で“実験”しており、フランスではそういうことが多々許されるそうです。“インフォームドコンセント”も無いらしく、極端な例では、高齢者の頸部骨折など家人が来る前にやっしまい、それほど国民から医師は信頼されています。手術は3人チーム(Chef de Clinic, Intern, 学生)で毎日8時から行われ、術後は再び麻酔科が回復室で診てくれるので、整形外科医はほとんど手術のみ

で一日を過ごします(欧州の病院のほとんどはこのシステムでした)。また、Internは担当の手術にのみ入るため、手術担当が無ければ午前中でも帰宅し、病棟主治医と手術担当医も異なる完全分業制です。ただ、お世辞にも手術はあまり上手くありませんでした。フランスの整形外科医は、30歳前後でChef de Clinique(いわゆる“専門医”です)となり、ほとんど全ての手術(脊椎、全関節、手、外傷、腫瘍など)ができなければなりません。しかし、その後訪問した“Centre Medico Chirurgical Paris V”と“Hopital Cochin”は、毎年発表される病院ランキングでも常にトップ3に入るフランスが誇る名門病院で、Prof. Courpiedを中心にピリリとした雰囲気があり、流れるような完成された手術が行われていました。また、外来が本当に勉強になり、レントゲンなども美しかったです。







## IKEURA TSUKASA

内科学第三講座

准教授 池浦 司

### 留学先施設名

イタリア・ヴェローナ  
Verona University

### 留学期間

2012.4.25～2012.9.30

私は2012年4月から6ヶ月間、「関西医科大学高度医療育成(スーパードクター)制度」を利用し、ヴェローナ大学(イタリア)にあり、Pancreas Centerに臨床留学しました。留学を希望した理由は、急性膵炎、慢性膵炎、自己免疫性膵炎などの膵疾患の病態生理や治療法の知識向上や日本では経験できない膵疾患の診療を海外で体験したいと考えたからです。上記の思いを、私の所属する当時の内科学第三講座の岡崎和一教授にお伝えしたところ快く許可して頂き、教授のご友人であるFrulloni先生がいらっしゃるヴェローナ大学を紹介して頂きました。

留学先の病院があるヴェローナ市は、北イタリアのアルプス山脈の麓にある街で、市内には古代ローマ時代の遺跡や中世の街並みなどが数多く残されています。2000年には、ユネスコが定める世界遺産(文化遺産)のひとつとして登録され、シェイクスピアの戯曲「ロミオとジュリエット」の舞台となった街としても有名です。以上のような街の紹介を聞くと、大変優雅なイタリア生活を楽しめそうですが、残念ながら留学先の病院や私のアパートはヴェローナの中心地から離れた郊外にあり、飲食店やスーパーマーケットも少なく、バール(Bar)の



オープンテラスでカプチーノを味わうことなどできるはずのない場所でした。また、私の留学先の病院には当然日本人はおらず、さらに近隣の住民や店舗の店員にはイタリア語しか通じないため、日常生活では何をすることも苦労しました。しかし、そんな中でも街の人たちは私に優しく接してくれて、今でも大変感謝しています。

留学中の病院での生活は以下のようです。月曜日から金曜日は午前9時から病棟回診をFrulloni先生を中心とする消化器内科のメンバー全員で行います。日本の回診と同様に卒後間もない先生が、ベッドサイドで臨床経過をプレゼンテーションし、消化器内科医全員で診療方針についてディスカッションします。午後からは、主に内視鏡室で内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)や超音波内視鏡(EUS)を見学していましたが、放射線科での膵疾患の画像診断、病理科での膵切除標本の読影、外科での膵切除の見学もできました。これらの見学では、日本で決して経験できない症例や手技も拝見でき、大変勉強になりました。

私が留学中に強く感じたことは、日本の医療が世界の標準ではないということです。たとえば、日本での胆管狭窄による黄疸を伴う膵癌には全例ERCPによる胆管ドレナージを行い、その後手術へとまわりますが、イタリアをはじめとするヨーロッパ諸国ではERCPは行われず、黄疸のまま手術が行われます。また、日本で慢性膵炎患者を診療する際に、カモスタットメシル酸というタンパク分解酵素阻害薬がよく処方されますが、欧米ではこのような治療はいっさい



なされません。こういった日本と世界との診療の違いは、留学前より論文で十分認識していたことですが、留学では身をもって経験でき、大変衝撃を受けました。さらに、留学先の医師にどうして日本ではそのような診療をするのかと尋ねられた時、語学能力や知識の不足のため医学的根拠もとづいて、うまく説明できず大変悔しい思いをしたのを覚えています。日本の診療を世界に発信するため、医学的知識のみならず、語学力やディベート力も普段から鍛錬することが重要だと感じました。

留学中の経験は、帰国後の私の診療や研究に大きな影響を与え、私の人生の宝となっています。留学中は経済的に少しつらい思いをしましたが、それ以上のものが得られたと思っています。最後になりましたが、今回の留学を支援して頂いた大学関係者のみなさま、岡崎前教授をはじめとする内科学第三講座のみなさまには、心より感謝申し上げます。

## OHE CHISATO

病理学講座

講師 大江 知里

### 留学先施設名

アメリカ・ロサンゼルス  
Cedars-Sinai Medical Center

### 留学期間

2015.2.1～2017.1.31



私は卒後10年目に夫の研究留学も兼ねて、2年間米国のカリフォルニア州ロサンゼルスに留学する機会をいただきました。

1年目の留学先のシーダーズ・サイナイ医療センターは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の関連病院で、西海岸特有の温暖で快適な気候と安全な立地で、大変恵まれた環境にありました。所属先の病理・臨床検査部門は50名以上の医師が所属する大所帯で、さらに25名のレジデントやフェローが研修を行いながら診断業務にあたっていました。各医師は臓器・分野別に高度の専門的な知識を有し、そこで学ぶことにより効率よく幅広い臓器の診断技術を獲得できる体制が整っており、数名のみの病理医体制で全臓器を担当するという日本の診断システムとは大きく異なっていることに驚かされました。私は、渡米前に腎腫瘍に興味を持っていたこともあり、泌尿器系腫瘍病理の世界的権威として知られる先生の指導を受けながら、臓器専門性の高い病理診断技術を学ぶ機会を得ました。指導医は高いレベルの病理診断結果や教育システムを世界に発信されていたため、世界中から集まった豊富で質の高い症例を数多く経験することができ、毎日が刺

激に満ち溢れていました。丁度、WHO分類などの改訂時期であり、海外で最新の診断法を習得する経験が、帰国後の日本病理学会のコンサルタントや腎癌取扱い規約の改訂作業などの専門性の高い仕事にも繋がりました。

また、留学先では診断だけでなく臨床研究も重視されており、高悪性度腎癌の国際的多施設共同研究に参加する機会も得られ、新たな知見を見出すために、国境を越えて病理医が連携していくことの必要性を実感しました。2年目は、南カリフォルニア大学の泌尿器部門に在籍し、様々な専門性をもつ研究者とトランスレーショナルリサーチを行う経験を積みました。その経験を活かし、帰国後は他部門との連携により「臨床的問題を解決するための研究」を遂行することで、新規治療戦略に繋がる知見を発信できるよう尽力しています。

海外留学は私の病理医としてのキャリアだけでなく、家族皆にとって貴重な経験となりました。夫は、サンタモニカの癌研究所で行った皮膚悪性腫瘍についての研究経験が、現在の専門的な仕事に活かされているようです。娘達は、現地の小学校で英語を使ったコミュニケーションを身に着け、多様な文化や価値観に触れることができました。日本では十分に確保できなかった家族とかけがえのない時間を過ごした経験が、現在様々なことにチャレンジする力にも繋がっています。

海外留学のチャンスを掴むには、英語力やプレゼンテーション能力が大切であるのはもちろんのこと、自分が熱意を持って取り

組める分野を見つけ、成果を積み重ねておくことをお勧めします。私にとって、留学前に日本で築いた実績は小さいものですが、海外留学を通して発展させ、帰国後に本学でより大きく開花させることができました。夢や目標を持って、コツコツと日々の努力を続けること、人との繋がりや縁を大切にすることで、誰にでも道を切り開くチャンスはあると思います。高度医療育成(スーパードクター)制度を利用した学びの機会、高いレベルの診療能力を身に着けるだけでなく、人生観を変える貴重な経験になることと思います。是非、本制度を利用して新たな道を開拓し、医師としての活躍の場を広げてみてください。

本制度による留学をご支援して下さった講座のスタッフ及び大学関係者の方々に心より御礼申し上げます。





## YAGURA TAKUMA

整形外科学講座  
高度救命救急センター  
助教 矢倉 拓磨

### 留学先施設名

ロシア・クルガン  
Ilizarov Scientific Center  
イギリス・ロンドン  
St. George's Hospital  
ドイツ・マインツ  
The Johannes Gutenberg University of Mainz

### 留学期間

2016.4.2～2016.7.29



今回、4か月の海外留学の機会を得ましたのでご報告させていただきます。骨折治療の世界的非営利財団であるAO Trauma (本部: スイス ダボス) が毎年募集をかけているFellowshipに応募し合格したことがきっかけとなりました。

2016年5月から6月にかけての6週間、イギリスのNewcastle upon TyneにあるThe Royal Victoria Infirmaryへの渡航が許可され、その前後にも希望する渡航先があるなら、とのことで整形外科飯田寛和前教授から4か月の期間を与えていただきました。自身で交渉を開始し、上記のその他4施設にacceptしていただいたため計5施設の渡航計画となりました。

1施設目のRussian Ilizarov Scientific Center (Kurgan, Russia) はリング型創外固定器の発祥の地であり、発案者である今は亡きイリザロフ先生に直接の教えを受けた先生方から学ぶことができました。通常の骨折治療のみならず偽関節、変形癒合、感染(骨髄炎)、先天性奇形の手術治療ま

で幅広く経験し、全800床のほとんどの患者がリング型創外固定器を装着したまま歩行リハビリテーションを行っている病棟は刺激的な光景でした。

2施設目のSt George's Hospital (London, UK) では人口の多さもあって多くの重傷患者の搬送がありました。大阪府下にある3施設の高度救命救急センターの1つである関西医科大学でも年間約50例しか経験できない骨盤骨折の手術症例を、3週間で10例も経験できたことは非常に有益でした。アプローチ法は日本に帰ってからの手術に活かせるポイントが多く、日本ではまだ使用可能とはなっていないインプラントを多用している光景も目の当たりにし、導入に向けてアプローチの改善が求められることも痛感しました。

3施設目のThe Royal Victoria Infirmary (Newcastle upon Tyne, UK) は前述のAO Trauma Fellowshipとしての6週間でしたが、温かいスタッフに迎えられ、毎日約8例、6週間で約250例の手術に手洗いで参加することができました。救急初療現場の体験もさせていただき、1日に救急車10台、ヘリコプター1台のペースで運ばれてくる骨折外傷患者への対応や、日本との外傷システムの違いを学ぶことができました。人口

500万人圏に1施設の外傷センターとしての役割、非常に多くの骨折患者がシステムティックに手術へと流れていくシステムは日本にも取り入れるべき点が多くあるように感じました。

4施設目のThe Royal Infirmary of Edinburgh (Edinburgh, UK) はスコットランドにあり、イングランドであるロンドンやニューカッスルの病院との比較を楽しみにしていましたが、特記すべき様な大きな相違点はありませんでした。しかし、症例の傾向には少なからず違いがあり、執刀医によっても同じ骨折に対する治療のアプローチが違うのも興味深かったです。

5施設目のThe Johannes Gutenberg University of Mainz (Mainz, Germany) は教授のRommens先生が脆弱性骨盤輪骨折に対する分類の発案者として著明であり、小侵襲手術を学ばせていただくことを目的に渡航させていただきました。しかし不運なことに滞在中には骨盤骨折の手術症例には会うことはできませんでした。しかしもう1人の教授であるHofmann先生の非常に上手な匠の手術をたくさんみせていただくことができたため、有意義な2週間を過ごすことができました。この4か月の渡航を通し、普段面と向かっている重度四肢骨盤骨折の治療に大きく寄与するたくさんの経験をすることができました。

最後に、このような機会を与えて下さったAO Trauma Japan、関西医科大学国際交流センター、関西医科大学整形外科前教授飯田寛和先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。



## TANIGUCHI HISANORI

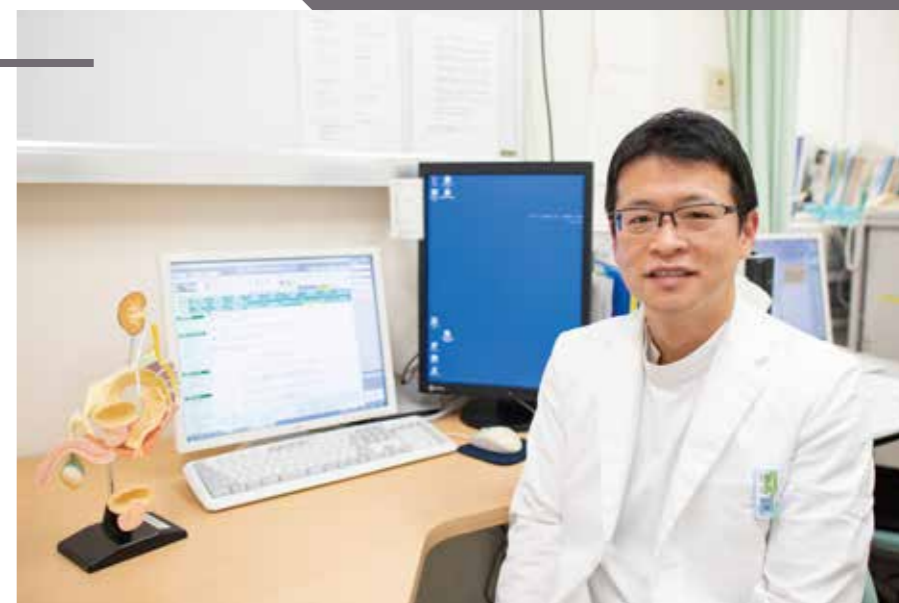
腎泌尿器外科学講座  
講師 谷口 久哲

### 留学先施設名

アメリカ・ニューヨーク  
Memorial Sloan Kettering Cancer Center

### 留学期間

2017.4.1～2017.9.30



2017年4月から2017年9月までの6か月間、本学における高度医療人育成(スーパードクター)制度にて米国ニューヨークのSexual & Reproductive Medicine Program, Department of Surgery, Urology Service, Memorial Sloan Kettering Cancer Center, New York, USAにvisiting investigatorとして留学しましたので、ご報告させていただきます。私は2003年に関西医科大学を卒業し、直ちに腎泌尿器外科学講座に入局いたしました。2012年から2016年までは本学の大学院生として基礎実験にも取り組みました。2010年から泌尿器外科学分野の中でも、特にアンドロロジーと呼ばれる性機能障害・男性不妊症・男性更年期障害をサブスペシャリティとして臨床に従事し、大学院時代の主な基礎研究テーマもマウス精巣における精子形成過程に関する研究でした。私はこれまで関西医科大学とその関連施設のみでしか仕事をしたことがなかったこともあり、以前からチャンスがあれば留学してみたいという気持ちがありました。そんな折、ある国内学会で知り合った泌尿器科の先生がMemorial Sloan Kettering Cancer

Centerへの留学を勧めて下さり、幸運にも受け入れられたのでした。

Memorial Sloan Kettering Cancer Centerはマンハッタンのアッパーイースト地区にある老舗のがんセンターです。泌尿器科専用のビルディングがあるぐらい施設は大きく、世界的に頻用されている悪性度分類などを発信する最先端の病院です。私の留学先のボス(P.I.)はProf. John P Mulhallで性機能分野における大御所で、この分野を専攻するもので知らない人はいません。今回の留学はいわゆる臨床留学でしたので、主に学んだことは実際の日常診療・手術と臨床研究です。フェローに付いて外来患者の問診をとる。問診内容をP.I.へ提出し、discussionを行い、患者の治療方針を決めていく、といった米国の教育体制の中で専門的な知識を学び、性機能関連手術は、日本では行われることの少ないPenile implant surgeryやペロニー病に対するPlication surgeryを学びました。また、いくつかのClinical studyが行われている中で、私もいくつかのprojectをprimary fellowとして担当し、学会発表・論文の作成を行いました。抄読会では英文を批判的に読む方法などについて具体的にP.I.から指導を受けることができました。また、この留学期間中Memorial Sloan Kettering Cancer Centerの道向かいにあるCornell Universityで男性不妊症に関連するMicro surgery training courseに参加しました。Cornell Universityは男性不妊症の分野において世界的に有名です。実際にはラットを用いたトレーニングで、受講者は世界中

から訪れるのですが、日本からの受講者は私が2人目のことでした。

ニューヨークへの留学は私だけではなく、家族にとっても貴重な体験となりました。たくさんの観光名所を巡ることが出来ましたし、あこがれの“セントラルパークでジョギング”も達成しました。娘たちはSummer Campに参加し、他国の子供たちとの触れ合いをとっても楽しんでいました。週末には家族でフロリダのディズニーワールドへ“弾丸トラベル”を敢行したこともありました。当時共に働いたフェローとは今も交流があり、国際学会での再会を楽しみにしています。今後はこの体験を日常診療・後輩の育成に行かせていきたいと思っております。このような貴重な経験をさせていただいた腎泌尿器外科学講座のスタッフの皆様、大学関係者の方々から感謝いたします。







## KUNIEDA TAKENOBU

神経内科学講座

講師 國枝 武伸

留学先施設名

アメリカ・ロサンゼルス  
Ronald Reagan UCLA Medical Center

留学期間

2019.4.1～2020.3.31

本学の高度医療人育成(スーパードクター)制度にて2019年4月から1年間、米国のRonald Reagan UCLA Medical Centerに留学致しました。医師になった頃から漠然といつかは留学したいと考えていましたが、私を取り巻く様々な状況が複雑に絡み合い、時間だけが過ぎて行きました。このままグズグズしては留学に行くことは一生できないと考え、最後のチャンスとして思い切って国際学会でProf. Davidに受け入れをお願いしたところ、思いがけず受け入れ許可がもらえたため、やっと留学への道を開くことができました。UCLA Medical Centerは、脳卒中診療における世界のリーディングホスピタルの一つであり、全米屈指の名門校UCLAに隣接した好立地にあります。Stroke Teamは、私が所属していたStroke Neurologyの他、Interventional NeuroradiologyやNeurocritical Careなど、幾つかの部門で構成されており(UCLA Comprehensive Stroke Center)、それぞれが協力して脳卒中診療を行っていました。Stroke Neurologyでは、平日の8時30分からカンファレンスが始まり、引き続いて回診が行われていました。診療チームは6人のみで構成(指導医1/フェロー1/レジデント4)されており、1週間毎に指導医・レジデントがローテートするため(フェローは2週間毎)、チームのメンバーが固定されず、主治医制を基本とする日本との違いに驚かされました。いわゆるチーム医療の理想形を目の当たりにしたわけですが、この体制だと患者個々に対するテーラーメイド治療を行うことはできず、画一的な治療を選択せざるを

得ないことになり、米国でEvidence-Based Medicineが重視される理由の一端なのだろうと感じました。UCLA Medical Centerは人員も豊富であり、各部署の連携も良く、脳卒中診療に対する考え方がチームで共有されているため、優れた脳卒中診療体制を構築できているのだと認識できました。ただ、UCLA Medical Centerでは、雑談しながら仕事をするスタッフが非常に多く、勤勉実直を旨とする日本との文化の違いには少し戸惑いを覚えました(医療スタッフに限らず、ショップの店員や公共の窓口担当者も常に雑談しています)。しかし、基本的には勤務時間が守られているからか、みんな楽しそうに仕事に取り組んでおり、このような米国と日本の医療の違いを肌で感じる事ができたことは、本当に貴重な体験であったと思っています。また、この留学は私だけでなく家族にとっても貴重な経験となりました。西海岸の明るい太陽と抜けるような青空、さわやかで温暖な気候のLos Angelesは、留学先として最高のロケーションであり、我々が住んでいたUCLAの城下町であるWestwoodは治安も良く、3人の娘たちは各々middle / elementary / preschoolに通うことで、



語も習慣も異なる世界を体験することができました。週末は家族で色々な場所に出かけ、特に国立公園を訪れた時は、日本では見たこともないような大自然の迫りに、広大なアメリカ大陸を実感し感情が揺さぶられたことを今でも鮮明に覚えています。異文化の中で暮らしていくことは楽しいことばかりではありませんが、母国を離れることで初めて感じる事ができる困難や、それを克服する過程、同じ志を持つ世界中の仲間との出会いにこそ、留学の意義があるのではないかと改めて実感しています。もし留学を考えている先生がおられるなら、いつからでも遅すぎることはないの、思い切って世界に飛び出してみたいと思います。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださった日下前教授、留学を支援して頂いた神経内科学講座のスタッフおよび大学関係者の方々に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。



## NAKATAKE RICHI

外科学講座

助教 中竹 利知

留学先施設名

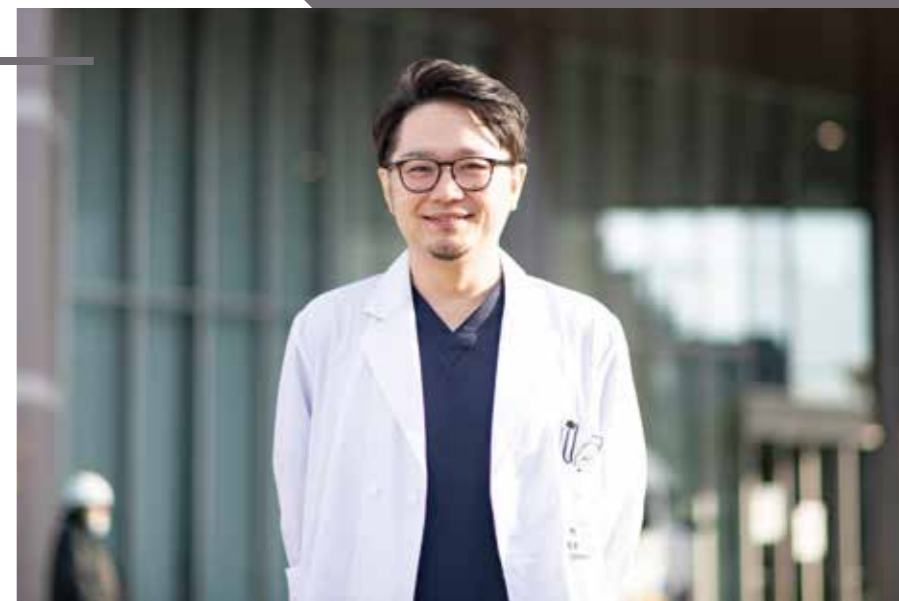
ドイツ・アーヘン  
University Hospital RWTH Aachen

留学期間

2019.5.8～2021.3.31

私は2019年から2年5ヶ月間、ドイツのNRW州アーヘンに滞在しました。消化器外科専門医および学位を取得した後に、2年間の関西医科大学高度医療人育成(スーパードクター)制度の支援を受けてRWTHアーヘン大学病院に留学しました。私は学生の頃から海外留学に憧れを持っていました。関西医科大学卒業後は、外科医として診療や研究に関わってきました。単一の施設で臨床や研究を行うのではなく、異なる環境に身を置くことで自身の成長を得たいと思い、留学することを決断しました。

RWTHアーヘン大学は世界で最も有名な工科大学の一つで、医療機器開発も積極的に行っています。大学病院はヨーロッパ最大規模の施設であり、消化器移植外科講座では多くの手術を行い、実験外科講座では企業とともに医療機器開発を行っています。私は副学部長Tolba教授の指導のもと、両講座に所属して臨床と研究に積極的に参加しました。具体的には消化器外科全般の手術や移植手術、カンファレンス(術前、術後ならびに研究)にも参加し、手術手技や術前術後のマネジメントを学びました。主に腹腔鏡下肝切除術や肝移植術、ロボット支援下膵頭十二指腸手術に参加しました。研究面では、RWTHアーヘン大学関連の企業や慶應大学との共同で機器開発を行いました。またドイツの研究助成金を獲得して、関西医科大学で行っていた敗血症に対する基礎研究を移植分野に発展させました。新型コロナウイルス感染症の影響により、



ヨーロッパの他の病院見学が不可能だったことは心残りですが、ドイツでの仲間や上司に恵まれた環境を活かして、国際共同研究を継続するために今後も連絡を取り合っていきます。海外留学は私の医師としてのキャリアだけでなく、貴重な人生経験となりました。切磋琢磨し合える仲間に出会い、異なる言語や文化を持つ友達や同僚が沢山できました。海外での子供との生活を通して、家族の信頼は深まりました。日本とは異なり、仕事や生活は何事もうまくいかないことが多く、様々な経験によって人生観が大きく変わりました。無事帰国して、医師として関西医科大学で勤務できることに喜びを感じております。現在、総合医療センター肝胆膵外科に所属しています。症例や指導に恵まれた環境下で、海外で得た知識と経験を活用したいと日々努力を行っています。最後になりましたが、留学への挑戦にご支援して下さった母校である関西医科大学、卒後臨床研修センターおよび大学関係者の方々に心より御

礼を申し上げます。『関西医科大学高度医療人育成(スーパードクター)制度を活用して良かったこと』大学を代表した公費留学は、海外で仕事を始める際に皆の信頼を得る一助となります。また留学中も関西医科大学のポジションを保持できるため、文科省科研費など日本国内の研究助成金に応募できました。資金で雇用した博士研究員とともに、ドイツと日本で並行した基礎研究を行えました。海外留学では金銭面に問題が生じて、生活が不安定になることをよく聞きますが、本学の補助によって生活費を心配することはあまりなく、集中して修練に打ち込めました。

